The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	二人のネアエラ : Hor. C. 3. 14 と Epod. 15
Author(s)	中村, 満耶
Citation	神話学研究. 2024, 3, p. 34-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

二人のネアエラ：Hor. *C.* 3. 14 と *Epod.* 15[1]

中村　満耶

序

ホラーティウス『カルミナ』（以下、*C.*）第 3 巻第 14 歌は、アウグストゥスがヒスパニアへの遠征[2]を終え、前 24 年に帰還したことを記念してつくられた詩である。詩人は第 1 連から第 3 連で神々への感謝の儀を執り行うよう人々に告げたのち、第 5 連から第 7 連では個人的な酒宴の支度を始める。この第 4 連を挟んだ前半部分と後半部分の関連性は、これまでに様々な議論がなされてきた[3]。

また第 6 連の中で、詩人は召使に言いつけてネアエラという女性を招こうとする。酒宴に際して楽人などの女性を呼ぶ場面は同詩集の他の詩にも見られる[4]が、遅れるようなら止す、というような消極的な態度を示しているものはこの詩のみである。

本論文の目的は、この第 6 連、とくにネアエラについて考察を行い、詩全体のさらなる統一的な理解につなげることである。そのために、同詩人の先行作品である『エポーディー』（以下、*Epod.*）第 15 歌に登場するネアエラと関連付けて考えてみたい[5]。各詩集のうちにえがかれるネアエラは同一の性質を与えられながら、それぞれの詩集の性格を反映させていると見られるからである。手順としては、先に *Epod.*15 におけるネアエラの性質を検討し、その後 *C.*3.14 の考察を行う。

---

[1] 本稿は 2018 年 8 月 4 日（土）に開催された第 17 回 ギリシア・ローマ神話学研究会（於大阪大学）にて行った口頭発表の内容を修正し、発展させたものである。諸般の事情により執筆が遅れてしまったが、当日、様々なご指摘を賜った皆様にはこの場をお借りして厚くお礼を申し上げる。

[2] この遠征については Syme, R. *Roman Papers 2.* Oxford, 1979, 825ff.を参照。

[3] Johnson, T.S. "Sympotica Horatiana: Problems of Artistic Integrity." *Philologus* 141.2 (1997), 324 (esp. n.9); Marks, R. “Augustus and I: Horace and ‘Horatian’ Identity in ‘Odes’ 3.14.” *The American Journal of Philology*, 129 (1), 2008, 78f.; Lyne, R. O. A. M. *Horace: Behind the Public Poetry.* New Haven and London 1995, 169ff.

[4] *C.*1.17, 2.11, 3.28, 4.11.

[5] *C.*には数々の女性が登場し、同一の名前の女性が複数の詩にあらわれることもある。これらの女性の間の連続性や関連性については見解が分かれている。Cf. Johnson, T.S. “Locking-in and Locking-out Lydia: Lyric Form and Power in Horace’s *C.* I.25 and III.9.” *The Classical Journal*, 99 (2), 2003-04, 126, n.38.

I

*Epod.*15 は、詩人が愛の誓いを破ったネアエラに怒り、彼女が心を移した他の男には敗北を認めながらもいずれ自分と同じ目に遭うことをほのめかす、という内容の詩で、原文は以下の通りである。

Nox erat et caelo fulgebat Luna sereno
  inter minora sidera,
cum tu, magnorum numen laesura deorum,
  in verba iurabas mea,
artius atque hedera procera adstringitur ilex 5
  lentis adhaerens bracchiis,
dum pecori lupus et nautis infestus Orion
  turbaret hibernum mare
intonsosque agitaret Apollinis aura capillos,
  fore hunc amorem mutuum, 10
o dolitura mea multum virtute Neaera!
  nam siquid in Flacco viri est,
non feret assiduas potiori te dare noctes
  et quaeret iratus parem,
nec semel offensi cedet constantia formae, 15
  si certus intrarit dolor.
et tu, quicumque es felicior atque meo nunc
  superbus incedis malo,
sis pecore et multa dives tellure licebit
  tibique Pactolus fluat 20
nec te Pythagorae fallant arcana renati
  formaque vincas Nirea,
heu heu, translatos alio maerebis amores:

ast ego vicissim risero.[6]

夜、澄んだ空に月が／小さな星々の間で輝いていた時、／きみは、大いなる神々の意思を損なうにもかかわらず、／私に誓いを立てており、／それは背の高いトキワガシに蔦が／しなる腕でしがみつき巻きつくよりも固いはずだった、／家畜に狼が、船乗りにオリオンが敵意をもって冬の海をかき乱し、／アポロンの無造作な髪を微風があおるかぎり、／この愛は二人のもの――と、／おお、私の男らしさを大いに嘆くであろうネアエラよ、／というのも、フラックスに男の面目があれば、／きみが夜ごと力ある者に身を任せるのを我慢したりせず／怒って自分にふさわしいひとを探すだろう、／また悲しみが心に入り込み確かなものとなれば、／憤った者の決意が美しさに屈することはないだろう。／そして、幸せになり、私の災難によって今／思い上がり、ふんぞり返って歩いているお前は、／裕福で多くの家畜や土地を持ち、／パクトルス川もお前のために流れていよう、／お前は生まれ変わりのピュタゴラスの秘儀を理解し、／容姿でニレウスに勝ってもいよう、／ああそれでも、他の男に移った愛をお前は嘆き、／その一方で私は笑うことになろう。

コメンタリー等でも指摘されている通り、この詩は同時代の恋愛エレゲイア詩の色合いを帯びていながら、二人称で呼びかける相手のみならず自らをも自嘲的に中傷するイアンボス詩の型に則っている[7]。冒頭の情景（1-4）については一般に、恋愛エレゲイア詩やヘレニズム期の恋愛エピグラム詩に範を取っていると説明される。たとえば、1-2 行目の夜空に月が輝く様子は、詩人と恋人の逢瀬の場面で見られる典型的な情景であり[8]、周りの星々も恋人の誓いの証人として言及される[9]。

これに加えて、ネアエラの誓いに至るまでの各所には祝婚歌の影響が見られることが指摘されている[10]。弁論家メナンドロスによれば、「初夜の床へ誘う歌（κατευναστικὸς λόγος）」においては、聴衆に新郎を床へ向かわせるよう呼びかけた後、夜や星の輝かしさを称える

---

[6] テクストは Shackleton Bailey, D. R. *Horatius: Opera.* Stuttgart 2001 を使用した。なお日本語訳は筆者による。ギリシア・ラテン語の固有名詞の長音等は適宜、省略した。

[7] Kiessling, A., and R. Heinze. *Q. Horatius Flaccus: Oden Und Epoden.* 13th ed., Dublin / Zürich 1968, 542f.; Mankin, D. *Horace: Epodes.* Cambridge 1995, 234f.; Watson, L. A. *Commentary on Horace's Epodes.* Oxford 2003, 458-461.

[8] Prop.1.10.1-10; Ov.*Am.*1.5.1-6.

[9] E.g. *C.*2.8.9-12; *Anthologia Palatina*（以下、*AP*） 5.8, 165, 191.

[10] Watson, 464-466.

べきだと説明されている[11]。また *Epod.*15 の 5 行目にはトキワガシに絡みつくツタの描写があるが、男性を樹木に、女性をつる植物に喩える植物のイメージとの関連付けもカトゥッルスの同様の場面に見出すことができる[12]。さらには季節や時に関する事柄も祝婚に関するスピーチでは取り上げられるという[13]。ネアエラの立てた誓いは「オリオン座が冬の海を荒らし、微風がアポロンの髪を掻き上げる、そのかぎりにおいて愛はお互いのもの」としているが、微風が春を暗示するものであるとすれば[14]、季節のめぐりにあっても変わらぬ愛を誓うという、祝婚を思わせるような表現となる。

ところが、この一連の誓いが破られることは、「大いなる神々の意思を損なうにもかかわらず（magnorum numen laesura deorum, 3）」という 3 行目の記述によって予示されている。また誓いの言葉にあらわれる家畜にとっての狼（pecori lupus, 7）は、*Epod.*の前出の詩で相容れない脅威としてくり返しあらわれるモチーフである[15]。そのような破綻の暗示にもかかわらず、祝婚歌の常套表現を用い、10 行目の「共通の愛（amorem mutuum）」で誓いを結ぶことは、詩人がその当事者であるがゆえに自嘲の色を帯びている。誓いを破られた詩人がすぐさま「男らしさ（virtute, 11）」や自身の男としての面目（in Flacco viri est, 12）を持ち出し、怒り（iratus, 14）をもってネアエラとの訣別の姿勢を示す様子もまた、イアンボス的な笑いを誘う[16]。

加えて、男女の関係だけでなく家庭や共同体の調和を象徴する結婚を想起させることで、誓いを破ったネアエラがそれらを脅かす側面を持つ存在であるとほのめかすこともできよう。*Epod.*の他の詩や別の詩集にはカニディアという魔術を用いる女性が登場するが、彼女もまた男性や共同体にとっての脅威としてえがかれている[17]。これに連なる女性像を、ネアエラにもまた見出すことができるのである。

さらに特筆すべきは、この詩の終盤や後続の詩との関連において示される負の循環のイ

---

[11] Men.Rhet.410.18-20: μετὰ ταῦτα ἥξεις ἐπὶ τὸν καιρὸν καὶ τὴν ἑσπέραν, ἐν ᾧ διασκευάσεις καὶ διαγράψεις τὰ κάλλη τῆς νυκτός, τοὺς ἀστέρας, τὰ φέγγη τούτων, τὸν Ὠρίωνα, ... たとえば明星への言及が Cat.62.20 et passim, 64.329 に見られる。
[12] Cat.61.102-5; 62.49-58.
[13] Men.Rhet.410.30-411.2: μετὰ ταῦτα καὶ ἀπὸ τῆς ὥρας τοῦ ἔτους ἐπιχειρήσεις…
[14] E.g. Cat.46.3: iucundis Zephyri… auris.
[15] *Epod.*2.60, 4.1-2, 6.1-2, 7.11-12, 12.25-26.
[16] Cf. Harrison, S. J. “Some Generic Problems in Horace’s Epodes.” *Iambic Ideas: Essays on a Poetic Tradition from Archaic Greece to the Late Roman Empire*, ed. by Alberto Cavarzere et al., Lanham, MD 2001, 181-182.
[17] *Epod.*5, 17; *Sat.*1.8, 2.1, 8. とくにローマ社会の脅威としてのカニディアについては Oliensis, E. *Horace and the Rhetoric of Authority.* Cambridge 1998, 68-90 を参照。

メージである。詩人はネアエラが心を移した「誰か（quicumque, 17）」に呼びかけの対象を変え、彼の持つ富（sis... dives... Pactolus fluat, 19-20）や教養（te Pythagorae fallant arcana renati, 21）、優れた容姿（formaque vincas Nirea, 22）といった美点を並べ立てる。この箇所は恋愛詩のストックキャラクターである裕福な恋敵[18]を思わせる一方で、恋敵の富と容姿への言及は祝婚歌の常套表現にある新郎の美点を称える一節と重ねることもできる[19]。しかしそれらは前置きとして列挙されているに過ぎず、重点は最後の 2 行にある[20]。恋敵もまた自分と同じ目に遭い、嘆くことになる（maerebis, 23）と言うのである。23 行目の translatos という語は、2 行前の「生まれ変わりのピュタゴラス（Pythagorae... renati, 21）」を踏まえることで再生による循環を連想させ、また次行の vicissim と縦列されていることでその含意を強めている。最終行末の risero は、確信に満ちた詩人の嘲笑だけでなく、再び繰り返されることの空しさをも思わせる[21]。そしてこの空しさは、後に続く第 16 歌の内戦によって消耗するローマの情景へと引き継がれるのである[22]。

以上で見た通り、*Epod.*15 のネアエラは恋愛エレゲイア詩的な恋人としてえがかれていると同時に、*C.*の中にも見出される家庭や共同体を脅かす魅惑的な女性[23]の先駆けとも言える性質を持っていると言える。

II

次に *C.*3.14 の全体の流れと、詩の主題についての検討に移りたい。

Herculis ritu modo dictus, o plebs,
morte venalem petiisse laurum
Caesar Hispana repetit Penatis
    victor ab ora.
unico gaudens mulier marito　　5

---

[18] E.g. Prop.2.16; Tib.1.5.59-60; 2.3; 2.4; Ov.*Am.*3.8.
[19] Cat.61.149-150, 189-192. また Hague, R. H. “Ancient Greek Wedding Songs: The Tradition of Praise.” *Journal of Folklore Research*, 20 (2/3), 1983, 133 を参照。
[20] このような技法（プリアメル）については Race, William H. *The Classical Priamel from Homer to Boethius.* Leiden 1982.を参照。
[21] Mankin, 239f.
[22] Fitzgerald, W. “Power and Impotence in Horace’s Epodes.” *Horace: Odes and Epodes*, ed. by Michèle Lowrie, 2009, 141-59.
[23] 後述する *C.*2.8 のバーリーネーなど。

prodeat iustis operata sacris,
et soror clari ducis et decorae
　supplice vitta
virginum matres iuvenumque nuper
sospitum. vos, o pueri et puellae　　10
non virum expertae, male nominatis[24]
　parcite verbis.
hic dies vere mihi festus atras
exiget curas; ego nec tumultum
nec mori per vim metuam tenente　　15
　Caesare terras.
i, pete unguentum, puer, et coronas
et cadum Marsi memorem duelli,
Spartacum si qua potuit vagantem
　fallere testa.　　20
dic et argutae properet Neaerae
murreum nodo cohibere crinem;
si per invisum mora ianitorem
　fiet, abito.
lenit albescens animos capillus　　25
litium et rixae cupidos protervae;
non ego hoc ferrem calidus iuventa
　consule Planco.

ヘラクレスのように今、おお民衆よ、／死によって購われるべき勝利を求めたと言われた／カエサルが、ヒスパニアの地から住まいへと／勝利者となって戻る。
ただ一人の夫に喜ぶ妻は／正しい供儀に参列して進み出よ、／また立派な指揮官の

[24] この箇所のみ、写本の読みのひとつである male nominatis を採用し、テクストに変更を加えている。詳細は Nisbet, R. G. M., and N. Rudd. *A Commentary on Horace: Odes Book III.* Oxford 2004, 186 を、また他の箇所の校訂については Nisbet, R. G. M. “Some Problems of Text and Interpretation in Horace Odes 3, 14 (Herculis Ritu).” *Papers of the Liverpool Latin Seminar,* 4 (1983), 105-19 を参照。

姉君と、／祈願のリボンで飾られた、
乙女や無事であった若者の／母親も。おお少年たちよ、／未だ男を知らない少女たちよ、悪しき不吉な／言葉を慎め。
私にとってまさに祝祭のこの日は、黒い／不安を追い払ってくれよう、私は動乱も／力ずくの死も恐れない、カエサルが／地上を治めるかぎりは。
少年よ行け、取って来い、香油と冠と、／それからマルシー人との戦を記念した酒壺を、／もしうろつくスパルタクスを／欺いたものが何かあれば。
そして伝えよ、声澄みわたるネアエラへ／没薬の香る髪をまとめて急ぐよう、／もし意地悪な門番によって／遅れるようなら、去るがいい。
白くなる髪はいさかいや／不埒な喧嘩にはやる気持ちをやわらげる。／若くて血気盛んな、プランクスが執政官の頃の私なら／これを我慢していないだろう。

C.3.14 は全体を第 1 連から第 3 連、第 4 連、第 5 連から第 7 連の 3 つに分けることができる。第 1 連は、詩人がアウグストゥスの戦勝と来たるヒスパニアからの帰還を民衆に宣言する場面に始まる。続く第 2 連と第 3 連は、詩人が凱旋に先立つ祝祭の準備をうながす場面である。詩人はアウグストゥスの家族、帰還した兵士の母親たちに祭儀に備えることを、また少年少女たちには口を慎むよう呼びかける。第 4 連では、これまで public orator として民衆に語りかけてきた詩人自身に焦点が当たり、アウグストゥスの統治によってもたらされる安心や平穏が個人のレベルにおいて述べられている。第 5 連と第 6 連で、詩人は酒宴を取り仕切る者として、召使（puer, 17）へ呼びかけて酒宴の支度を命じる。また詩人は余興のためにネアエラを呼んで来るよう言いつけるが、遅れが生じる場合は立ち去るように言う。その理由を語るようにして詩人の過去が回想され、第 7 連は締めくくられる。「行け（i, 17）」や「伝えよ（dic, 21）」、「去れ（abito, 24）」といった指示は、先に見た冒頭の 3 連での public orator の号令と同じく命令法で述べられており、詩人の立場は異なるものの、語り手の言葉の上では全体に統一性を与えている[25]。

全体の流れを確認したところで、この詩の主題について探っていきたい。まずこの詩の冒頭 3 連は個人の帰来を祝う賞賛詩の形式に則っている[26]。詩人はアウグストゥスの帰還を

[25] Cf. Cairns, F. *Generic Composition in Greek and Roman Poetry.* Oxford 2007, 179-183.
[26] Ibid., 21ff., 181ff.

宣言し（Caesar... repetit, 3）、命にかかわる危機を経たこと（morte venalem, 2）[27]や辺境の地から故郷へ帰ってきたこと（Hispana... ab ora, 3-4; Penatis, 3）を語っている。またアウグストゥスの親族（unico gaudens mulier marito, 5; soror... ducis, 7）から兵士の母親たち（matres iuvenumque, 9）にいたるまであらゆる身分の女性たちが言及され、出迎えのために進み出る（prodeat, 6）よう促される。少年少女たち（pueri et puellae, 10）も居合わせる中、厳かに祭儀が執り行われる（male... verbis, 11-12）。これらは賞賛詩の形式に常套的に用いられる要素である。

また帰還するアウグストゥスの姿は英雄ヘラクレスのそれに重ねられている（Herculis ritu, 1）。タルテッソスでのゲリュオン討伐を終えたヘラクレスによるイタリア訪問になぞらえることで、戦いによって世界に秩序をもたらす者としてアウグストゥスをえがいていると言える[28]。さらにヘラクレスは詩神ムーサイと関連付けられ、芸術を守護する存在でもあった。前 29 年に再建、奉納されたムーサイのヘラクレス神殿（Aedes Herculis Musarum）はヘラクレスをムーサイの指揮者（Musagetes）として祀っており、ムーサイの司る調和を象徴する神殿である[29]。このようなヘラクレスの側面を示唆することは、冒頭 3 連でえがかれるローマの人々がアウグストゥスの戦勝を受けてひとつの祝祭に召集される様子にそぐうと考えられる。

そうしたアウグストゥスの輝かしいイメージに対置されるように、第 5-7 連では過去の戦争や内戦の記憶が示される。詩人が召使に取りに行かせる酒は、スパルタクスの魔の手を逃れた（Spartacum / fallere, 19-20）、マルシー人との戦を記念する（Marsi memorem duelli, 18）ものである[30]。本来ならば酒は諸々の不安を忘れるために飲まれるものであり、またそのような機能を期待して相手を慰める場合などにおいてしばしば言及されるが[31]、ここでは

---

[27] アウグストゥスが遠征中に病を患ったことについては Dio 53.25.7 を参照。また「死によって購う」という表現はピンダロスの祝勝歌にも見られる（Pind.*P.*6.39: πρίατο μὲν θανάτοιο κομιδὰν πατρός）。

[28] 本作品以外にも *C.*3.3.9-12, 4.5.36; Verg.*Aen.*6.801ff.; Dio 56.36.4.に同様のほのめかしが見られる。Cf. Galinsky, G. K. *The Herakles Theme: The Adaptations of the Hero in Literature from Homer to the Twentieth Century.* Oxford 1972, 126ff.

[29] アウグストゥスによる「ムーサイのヘラクレス」神殿の再建については Suet.*Div. Aug.*29.5; Ov.*Fast.*6.801-812（cf. オウィディウス（著）高橋宏幸（訳）『祭暦』国文社、1994 年、371 ページ注 182）を、また調和の象徴であることについては Hardie, A. “Juno, Hercules, and the Muses at Rome.” *The American Journal of Philology*, 128(4), 2007, 560-564 を参照。

[30] Nisbet and Rudd (2004), 188.

[31] E.g. *Epod.*9.37-8: curam metuumque Caesaris rerum iuvat / dulci Lyaeo solvere; *C.*1.7.31: vino pellite curas, 2.7.21: oblivioso… Massico; 2.11.17-18: dissipat Euhius / curas edacis.

過去の戦いの記憶を呼び覚ますものとして提示されている。そのいっぽうで belli の古形である duelli は時間の経過を思わせ、過去の記憶は言わば「過去」のままに現在に存在していると言える[32]。

また最終連で詩人が回想する自身の過去は「プランクスが執政官の頃（consule Planco, 28）」、すなわちホラーティウスがブルートゥス側についてピリッピーの戦いに参加した頃のことである[33]。ホラーティウス自身の、それも過ちとも言える過去への言及は、詩人とこれまで提示してきた「過去」を結びつける。

このような過去の戦いの記憶は、詩の転換点である第 4 連の「黒い不安（atras / curas, 13-14）」や「動乱（tumultum, 14）」、「力ずくの死（mori per vim, 15）」に対応しており、「この…祝祭の日（hic dies... festus, 13）」やアウグストゥスの統治（tenente / Caesare terras, 15-16）によって退けられるとする（exiget, 14; nec... metuam, 15）。さらに第 1 連と第 4 連は morte（2）と Caesar（3）、mori（15）と Caesare（16）という同じ単語のペアが成す円環構造によってリンクされ、末尾の 3 連で言及される過去と、「この日（hic dies）」という言葉が提示する現在との対比は強められる。そして第 4 連の記述がこの詩の中間にあることで、焦点は現在の喜びと調和に置かれるのである[34]。

III

*C.*3.14 の全体について確認したところで、ネアエラの考察に入る。まず第 2 連および第 3 連で言及されている女性たちは皆、「ただ一人の夫に喜ぶ妻（unico gaudens mulier marito, 5）」、「立派な指揮官の姉（soror clari ducis, 7）」、「母親（matres, 9）」、「未だ男を知らない（non virum expertae, 11）」のように、婚姻関係や男性との血縁関係が強調されている。それに対してネアエラは酒宴に際して招かれ、澄んだ声（argutae, 21）や没薬の香る髪（murreum... crinem, 22）などの特徴を持つことからも遊女であることがうかがえる[35]。詩人自らの声で祭儀の場に参加を呼びかけられる女性市民と、召使を介してもなお詩人の元に招かれるこ

---

[32] O'Gorman, E. "Archaism and Historicism in Horace's Odes." *Clio and the Poets. Augustan Poetry and the Traditions of Ancient Historiography.* ed. by D.S. Levene and D.P. Nelis, Brill 2002, 91; Oliensis, E. *Horace and the Rhetoric of Authority.* Cambridge 1998, 148.
[33] Nisbet and Rudd (2004), 190f.
[34] Moritz, L.A. "Some 'Central' Thoughts on Horace's Odes." *CQ*, 18 (1), 1968, 116–31.
[35] Neaera という名前も遊女によく見られるものである。Cf. Ullman, B.L. "Some Type-Names in the Odes of Horace." *CQ*, 9 (1), 1915, 29.

とが不確定である遊女ネアエラは対照的である[36]。

ここで初めに見た *Epod.*15 のネアエラの性質を思い起こしてみたい。*Epod.*15 のネアエラに見出されたような男性や共同体を脅かす女性像は、*C.*の前出の詩にも見られる[37]。たとえば *C.*2.8 に登場するバーリーネーは、*Epod.*15 のネアエラと同様に誓いを破るばかりでなく、それもまた自身の魅力とし、人々に懸念をもたらす。

> te suis matres metuunt iuvencis,
> te senes parci miseraeque nuper
> virgines nuptae, tua ne retardet
> aura maritos. (*C.*2.8.21-4)
>
> お前を母親たちは息子のために恐れる、／けちな老人や、またあわれな／嫁いだばかりのおとめたちもだ、お前の香りが／夫を遅らせるのではないかと。

いっぽう *C.*3.14 のネアエラは、ローマの人々に干渉しないばかりか、詩人によって意識的に遠ざけられる。*C.*3.14 のネアエラが *Epod.*15 のネアエラの性質、すなわち共同体にとっての脅威や破綻を避けられない負の循環のイメージを引き継いでいるとすれば、彼女を詩の舞台から遠ざけることは冒頭 3 連で提示された調和のテーマをいっそう際立たせる効果があると思われる。したがって、ネアエラに対する詩人の消極的な態度は、第 1-3 連で示された祝祭にのぞむ大勢の人々への布告と共同体の調和というテーマにおいて通底しながら、それをより狭小な遊女との一対一の関係に落とし込んだものと見ることができる[38]。

そしてネアエラとの逢瀬から身を退く詩人の姿にも注目したい。ネアエラの来訪を妨げることが想定されている門番（ianitorem, 23）は、パラクラウシテュロンのモチーフにおける類型的な人物である[39]。通常であれば詩人は扉や門番によって閉め出され、扉に向って嘆

---

[36] Marks, 83f.; Wyke, M. *The Roman Mistress: Ancient and Modern Representations.* Oxford 2007, 88. また市民女性の結婚と遊女の逢瀬の対照については Redfield, J. “Notes on the Greek Wedding.” *Arethusa*, 15 (1/2), 1982, 188 を参照。

[37] 後述の他には *C.*1.5 のピュッラ、1.8 のリューディアなど。

[38] 婚姻関係にもとづく調和をうたうことは、風紀にかんする政策を推し進めたアウグストゥスの政治方針に適うものでもある。Cf. Zanker, P. *The Power of Images in the Age of Augustus.* tr. A.Shapiro. Ann Arbor, MI 1988, 156-9.

[39] E.g. *AP* 5.30.3f.; Prop.2.23.9-10; Tib.1.2.5-6; Ov.*Am.*1.6, *AA* 3.587f. またパラクラウシテュロンやその派生である「閉め出された恋人（exclusus amator）」のモチーフについては Cummings, M.S. *Observations on the Development and Code of the Pre-Elegiac Paraklausithuron.* University of Ottawa, 1997; Copley, F.O. *Exclusus Amator: A Study in Latin Love Poetry.* Chico, CA 1981 を参照。

きや恨みを歌いかけるが、ここでは「立ち去れ（abito, 24）」とあたかも詩人が閉め出す側であるかのように言う[40]。さらに詩人は抒情詩やエピグラム詩の常套表現である白髪（albescens... capillus, 25）への言及[41]を持ち出し、今や争い（litium et rixae, 26）[42]に身を投じる年頃ではないことを過去の回想も交えながら述べる。これらのことから、ネアエラは *Epod.*15 と同じく恋愛エレゲイア詩的な魅力を持つ女性として提示されながら、酒にまつわる戦争の記憶と同様、過去に属するものとして現在と交わることなく存在していると考えられる。

このような抒情詩的とも言える一時性（temporality）は、最終連によって補強される。詩人の「これを我慢していないだろう（non ego hoc ferrem, 27）」という言葉は、文脈の上ではネアエラとの逢瀬への執着が今はないことを意味している。しかし *Epod.*15 の「きみが夜ごと力ある者に身を任せるのを我慢したりせず（non feret assiduas potiori te dare noctes, 13）」という同じ動詞と否定詞を用いた表現と比較すると、指示詞 hoc の内容はやや曖昧であり、同じ文中にある「白くなる髪がいさかいや／不埒な喧嘩にはやる気持ちをやわらげる（25-26）」を指していると考えることも不可能ではない。この場合に示唆されるのは詩人の時の流れに従う姿勢であり、過去に囚われない現在を選ぶ詩人の一見、受動的に見える能動的な姿勢と取ることができるだろう。詩人の目はやはり「この日（hic dies）」に向けられているのである。

結び

本論文では、*C.*3.14 におけるネアエラが、同詩人の先行作品である *Epod.*15 に登場する同名の女性を踏まえたキャラクターであること、またその下地が当該の詩のもつ賞賛詩としての性格に捻りを加えていることを論じた。*Epod.*15 のネアエラは恋愛エレゲイア詩的な恋人であると同時に、婚姻関係による調和を脅かす存在として提示されている。これらの性質を *C.*3.14 の冒頭 3 連で示される市民の女性たちと対比させることで、この詩の中核にある共同体の調和のイメージを強調している。また第 5-7 連ではネアエラを過去に属する存在として遠ざけることによって負の循環から離脱し、アウグ

---

[40] Nisbet and Rudd (2004), 190.
[41] E.g. Alcaeus fr.50 Lobel-Page; Anacreon 395.1ff. PMG; *AP* 5.112.
[42] lis は口論を、rixa は肉体的な争いを意味する。とくに肉体的な暴力は、パラクラウシテュロンにおいてしばしば見られる。Cf. Copley, 148, n.26.

ストゥスのもたらす現在の恩恵に与り生きるという詩人の carpe diem 的な態度を示しているのである。

（京都大学 非常勤講師）